
眠れぬ夜の夜想曲

水色の風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠れぬ夜の夜想曲

【Nコード】

N4623C

【作者名】

水色の風

【あらすじ】

つまらない日常を繰り返す少女はつまらない日常を生きる少年に出会った。正しいか間違っているかの判断を待たずに誰もが一歩ずつ、その足で歩いていく。眠れない夜が、僕らにとって優しい夜であるように。

第一片『光というものと。』その一

そういう意味では私もまた大多数の孤独、なのだろうか。

いかにも高校生的な表現だ。笑えてくる。まあ年相応ってか。

今日もつまらない日が始まる。繰り返しを繰り返すための日々。

私、鈴鳴玲は日々を消費するいかにも現代的な高校生だ。

灰色な毎日を、灰色なら灰色なりにできるだけ煌びやかに飾り立てる。

そして過ぎる。そう、ただ過ぎるのだ。

そこに疑問なんてない。だってみんなそうに違いないし、それが子ども時代を終え、

今まさに色んなことを知り、知ったが故の絶望に感覚が殺されていく只中にある私達十代のあるべき姿だと思うから。

そしてつまらない大人になってもっとつまらない日々を消費する。それが日本という飽和した社会の中を生きる人間に敷かれたレールなのだ。

なんちつてな。くだらない。出来るなら抵抗したい。出来るなら。せめてものの抗いで制服を校則違反のカタチに変形させる。

禁止されてるアクセサリーを付けて学校に行く。時々髪を染める。みんなと同じように。それは全くといっていい程効果を為さない抵抗だ。

だが、それでもしないと人生なんてやってられない。気が狂いそうになる。

「おい、鈴鳴、昼休み職員室に来い」

腹が立つほど清々しい朝。

私は登校するや否や校門の前に立っている生徒指導に怒声を浴びせられる。

奴の名前は谷原、体育教師、絵に描いた生徒指導。

たぶん朝礼を無視して普通の生徒が校門をくぐる常識的な時刻を30分ほど経過してから

私が校門をくぐったことと、左手にブレスレットをつけていることにケチをつけるつもりだ。

はいはい、分かりました、と適当に返事をして早足で校門をくぐる。後ろからまだ非難し足りないかのように谷原の叫び声が聞こえるが、そんなものは無視してさくさく進む。

だいたい400メートル四方の校庭を横断だか縦断だかして玄関に入る。

校舎内に入った瞬間、広いコンクリート建造物内独特のひんやりとした空気が

心地よく広がっているを感じる。

1年1組の下駄箱が玄関の左端にあつて、右へ行くと順に組と学年が大きくなる。

3年5組の下駄箱が右端。私は何も考えずに、当然の如く2年4組の下駄箱に進み、

若さ溢れるかわいい柄の封筒なんかが入った某男子の下駄箱とか、これまた若さ溢れる果たし状なんかが入った某女子の下駄箱とかを過ぎる。

『14番 鈴鳴』と活字の簡単な札が掲げてある下駄箱を開ける。

ローファーをしまい、上履きを取り出す。別段変わったことはない。男子からの恋文とかいうロマンティックなものも、

上履きに画鋏なんていうエキセントリックなものも一切入っていない。当たり前だけど。

ここまではいつも通り、つまらない灰色の日常だった。

「おー、おはよう鈴鳴さん」

ベースケースを背負った男子に突然声を掛けられる。

まさか、誰かに声を掛けられるとは思っていなかった。

だって30分遅刻だよ？普通の奴は真面目に来るか、1時間目サボ

るか、昼過ぎから来るか、

一日サボるか、病院とか訳ありで3時間目に来るかだよ？

この常識外時間登校（自分のことは棚に上げておく）の男は、
たかはしふみよし

高橋文由、同じクラスだ。

制服のカッターシャツはだらしなくズボンから出ていて、少し長めの髪はボサボサ、

眠たそうな眼は彼が目覚めてからさほど時間が経っていないことを雄弁に物語っている。

「お、おはよう。寝坊でもしたの？谷原に何か言われたでしょ」

私は、思いがけず人に会ってしまったことに戸惑いながら（クラスにいる時用の表情ではなく、まだぼーとした顔のままだった）、当たり障りのない言葉を探して高橋に話す。

「うん寝坊。谷原には呼び出し喰らったよ。鈴鳴さんはどったの？髪の設定？」

なぜか当たり障りのある言葉で返される私。上履きを取り出す高橋

「え、いつから私は髪の設定に時間かけるキャラにされてるの」
ちなみに私の今の髪型は肩にかかるくらい黒髪ストレート、まあ当たり障りのない髪型。

そんなに手の込んだ髪型には見えない筈なのだが。

言いながら、高橋が上履きを履いたのを確認して歩き始める。高橋も歩く。

玄関より中に入って左右に廊下が伸びている。その廊下を左に進む。

「や、髪の設定だったら面白いなと思ったただだよ」

と高橋は笑いながら言う。廊下に足音がふたつ。右側にある階段を昇る。

この時間なら朝礼は終わっている。教室に入って担任に咎められる心配はない。

「……ただ、なんとなく朝礼に出たくないだけだよ。最近」

不覚にも男子に、しかもあまり仲がいい訳ではない彼に本音を喋ってしまった。

顔はいつもの学校での私を演じながらも、心の中は憔悴しきつていた。

学校という場では当たり前障りなくしていることが求められるのだ。本音よりも建前。建前より常識。そうやって集団の中に溶け込むことで日々をやり過ごす。

制服の変形もアクセサリーの装着も、私の場合、個性を主張したいからするのではない。

つまらない日常へのささやかな抵抗、

そしてそれはあくまで大多数が行いうることをしなければならない。生徒指導に呼び出されるのもあくまで常識の範囲内でなければならない。

つまり、本当は反抗なんて立派なものではないのだ。

この葛藤と矛盾に満ちた世界をなんとかやり過ごす為の姑息な手段でしかない。

分かっている。でもどうしようもない。だから、私の基本行動原則は以上の通り。

そして、今この瞬間、なぜか分からないが、その原則から逸れた発言をしてしまった。

そんな私の心中を察しているのかいないのか、高橋は飄々と、当たり前のように言った。

「それも立派な理由だな。髪の設定や寝坊と何ら変わらない」あれ、髪の設定と寝坊は30分遅刻の立派な理由なのか。否。

彼が言いたいのはきつとそういう事じゃない。

朝礼に出たくないという私の意味不明であろう発言を認めてくれたのではないだろうか。

……なんて、人の発言を最大限に都合よく解釈するとは、今日は調子が悪い。

階段を昇り、2階に着いた。

「やー、いっつも澄ましてる鈴鳴さんでもそういうことってあるんだなー。なんかほっとする」

教室のドアの数歩手前、高橋はもみじまんじゅうにカスタードが入ってるものを

見つけた時くらいに、何気ない抑揚、何気ない表情でそう言った。

「ぺ、別に……いつも澄ましてるつもりなんかないよ……」

私の焦りは高校生活始まって以来のピークを迎えていた。

「そつかそつか、それならなおよい」

とかよく分からないことを言って高橋は教室のドアを開けた。

ガラガラと乾いた音を立てて教室のドアが開いた。

1時間目、公民の授業中にした高橋についての考察を少々。

私が集団に溶け込むことによって毎日をやり過ごす人間だとすれば、高橋はどうやら確固たる自分というものを持っていて、

そのためになら多少集団から浮いても構わないと思っている類の人間なのだろう。

毎日をやり過ごすのではなく立ち向かっているくらいの勢いがある。高橋はバンドでベースを弾いているが、

言われてみれば高橋のバンドはみんな浮いてる人間が集まっている気がする。

よって高橋は決して友達が多いわけではないし、

決してクラスとか学校とかの最大勢力云々に媚びたり寄ってきたりもしない。

ただ、高橋のすごいところは、

それでもどこか一目置かれていたり、一部からは信頼すらされているのである。

例えば、高橋のバンドでボーカルをやっている中村は、

中学の頃父親が騙されたとかで家庭が崩壊しかけ、

今でも苦しい生活を送っているという噂がある。

それ故に中村は一時期荒れた。警察の世話になったとかならないとか。

詳しいことは分からないが、中学3年の時に高橋とバンドを組んで

から中村は変わった。

非行をやめ勉強をして高橋と同じ高校を受けて合格した。

今でも人を滅多に信用しようとしないう中村だが、

高橋及びバンドのメンバーという時は私達が友達という時の何倍も楽しそうに笑うのだ。

中学時代の中村を知る私の友人はそれを高橋のお陰だと言った。

そういう逸話があるのも高橋が一目置かれていいる一因であろう。

なんだかんだ言って女子にも多少人気がある気がする。多少。

ただ彼は鈍いのか興味が無いのかマイペースなのか或いはその全てか、

あまりその類の噂は聞かないし、頑張つて格好つけたりもしてない。却つてそれが一部女の子の気を惹いていたりもするんだろうな。

ここまで考えて私は少し悔しくなつた。或いは羨望か。

私は必死に集団に溶け込もうとしていて、実際そうできているとは思ふ。

でも、溶け込んでしまえばそれ以上も以下もない。

そこから得ることも失うこともない気がする。

そしてそのフラットな状態を維持するために努力するのだ。

高橋はどうだろう。

確かに、集団からは浮いていて、敵も少なくはないのだ、と思う。

でも彼はそれ以上に毎日生きていて何かを得ている気がする。

全員が両手放しで認めるわけじゃない代わりに、認めている人は心の底から彼を認めている。

信頼、と呼ばれるものとはこういうものなのだろうか。

ちくしょう。

心の中で波浪注意報が出たのでそれ以上考えるのをやめた。

第一片『光というものとか。』その二

昼休み。中村が学校を休んでいたの（サボりだろうか）、つまらなさそうに

高橋がふらつと教室から姿を消した。

教室では各仲良しグループが集まって昼食を食べるのだが、きつと他のクラスにいるバンドのメンバーとご飯を食べるんだろうな。

悠長なことを考えていたら、教室のドアが勢いよく開いた。

私が自分の過失に気づいた頃には時既に遅く、

教室内にはキングオブ生徒指導・谷原の声がぴりぴりと響き渡るのだった。

「くおおら、鈴鳴！！高橋！！職員室に來いって言っただろうがぁ！！！」

…… やってしまった。完全に忘れてた。奴のことはアンドロメダ星雲のもつと彼方、

忘却の星へと消し去ってしまった。騒然となる教室。

…… 逃げたのか、高橋。ちくしょう。

「うおおおい、高橋はどうした！！出てこい！！」

…… 谷原、目が血走ってるよ。

親切な生徒がびくびくしながら言った。

「あ、あの、谷原先生、」

「なんじゃい！！」

一瞬、その生徒が縮こまった。罪のない生徒を威圧するな、体育教師。

「…… 高橋君は、あの、どこかに行きました」

「おい、お前ら、高橋の居場所は知らんのか」

首を横に振るクラス一同。血に飢えた生徒指導の目は私に向けられる。

「まあいい、鈴鳴！！まずお前だ！！ちよつと来い！！」

半ば引き摺られるように職員室に連れて行かれる私。クラスに目をやる。

みんなは呆然として見ている。

まるで大自然の摂理の犠牲になった草食動物を見るような目で。

分かつてはいるのだが、私が溶け込もうと必死になっている集団はこういう時頗る無力だ。

まあ、当然。私は咎められるべきことをしたから咎められる。

：確かにそうなんだけど、理屈は分かるんだけど：なんだか寂しくなった。

こういう時、高橋のバンドのメンバーはどうするだろうか。

そっぴや、中村が煙草吸ってるのがバレて親を呼ばれそうになった時、

高橋が庇って結局中村が説教食らうだけで済んだことがあったっけ。

高橋も巻き添えで説教を食らうことになったが、あの二人は

「んじゃ、ちよつとお勤めに言ってくる」

とか言って笑ってたっけ。羨ましいな、そういうの。

あれ、私はそういう反抗のパフォーマンスはもつと計画的にやって、親が呼ばれない程度に抑えるべきだとか思ってたなかったっけ。当時も、今も。

やっぱり今日は調子が悪い。きつとそうだ。

そっ、心の中で波浪注意報が出てるだけなのだ。

と、谷原の説教とは全くもって関係ないことを考えていて、

奴の話はほとんど聞き流していたけれど、兎に角、30分に及ぶ説教が終わった。

「あーあ、今日は友達と購買でパン買って食べる予定だったのにな」
ドアを開け、ひとりごちながら職員室から出た。

もうほとんどパンが残っていない購買でバターロールとミルクティ
ーを買って

ふらふらと廊下を歩いた。

廊下はただ真っ直ぐ伸びている。

他の生徒がこの時間にまだパンを持っている私を怪訝そうな目で見
る。

歩く。何も考えないようにして歩く。

ふと、屋上へと続く階段が目に入る。

3階建ての校舎のこの階段だけが屋上に通じている。

私が何も考えないようにしているのを戒めるように、階段はそこ
にある。

まるで一段一段が思考のプロセスを象徴しているようで、それが妙
に私の焦燥を刺激した。

今日は波浪注意報の日なのに。

いや、今日は波浪注意報の日だからこそ、か。

こつこつという感情的な話を抜きにすると、この階段の出現は都合がよ
かった。

今さら教室に戻って一人でパンを食べるのは厭だった。

この時間なら屋上で食事をしている生徒も教室に戻っていて、誰も
いないはず。

一人でパンを食べるには屋上は絶好の場所だった。

こうして、私はその思考のプロセスを登り始めた。

私は考える。

この世界について。

私は考える。

他人について。

私は考える。

私自身について。

……何ひとつとして答えは出ない。

答えが出ないから考えを放棄する、なんて話はゴマンとある。

だって、そんなこと考えるよりテレビ見てた方が楽しいじゃん。

ネットやってる方が楽しいじゃん。買い物行く方が楽しいじゃん。

でも、みんなきつと、心のどこかで答えの出ない問いを繰り返しているのだ。

この世界には安易な逃げ道がたくさん用意されている。

逃げるから、きちんと考えてあげないから、心が悲鳴を上げているんじゃないか。

そう思った。今までの私なら逃げていただろう。現にさっきまで逃げていた。

でもなぜか、この階段はそれを許してくれなかった。そんな日もある。

まあ、波浪注意報だし。

ここまで考えて私は階段を昇りきった。目の前には屋上に出る少し檻褻い扉がある。

ドアノブに手を掛け、開ける。

一気に眩い光と蒸し暑い空気が私を包んだ。屋上。

学校の中で、空に一番近い、場所。

外には冷房も扇風機もないけど、私は基本的に外の空気は好きだ。

特に、周りに見知った人のいない外が好きだ。

自由を、私は独占している。そんな気になったりもする。

私はその自由を全身に受け止めるように大きく伸びをする。

不意に、その独占は思い違いであったことを知る。先客がいたのだ。

私の後方、つまり、私が出てきた扉のある建造物、何て言ったらいいだろう、

屋上の屋上とも言えるその場所に、彼は居た。

私より空に近い場所で、高橋はヘッドフォンで音楽を聴いていた。私が気づいたのを見て、ヘッドフォンを取り外し、片手を挙げる。

「おー、鈴鳴さんもサボり？」

え……5時間目サボるつもりなんだ。

「私は昼ごはんを食べに來ただけ、谷原に説教食らって、こんな時間になって

今から教室で食べるの気まずいじゃない」

「はっはっは、ご苦労様」

高橋は腹の底から笑っていた。高橋だって説教の対象だったくせに。「や、笑いすぎた、ごめんごめん。だってこんな天気いい日に説教なんてさー」

私が不愉快そうに睨んでるのを見て高橋は軽く謝った。……軽く。そして続ける。

「鈴鳴さんも登ってきなよ、ここ景色いいんだ。今日は絶好のサボり日和だし」

「たまたま食事に来た女子を巻き添えにするのか、高橋君は」

……やばい、小説なら地の文或いは（）の中に書くべき内容が口を吐いて出た……。

「……まあ、別にいいけど。次の授業復習しかないし」

そういつて私はその建造物の側面にある梯子を登る。登りきって、思わず口が開いた。

「……わ、きれい……」

柵がなくて、私の住んでる街とその向こうの山を何にも遮られずに一望できて。

今日の空気は澄んでいて、日に照らされた山の緑は、

木々一本一本の濃淡が分かるくらいに鮮明に、美しい。

「な？サボり日和だろ？こんな景色放って授業に出るとか、勿体無いよ」

確かに、その通りかもしれない。……サボりはよくないけど、たぶん。

けれど、こんな景色に心を奪われて、毎日の繰り返しを一旦止める、そんな日があってもいい気がしてきた。

私は、適度に間隔を取って高橋の隣に座る。少し照れくさい。

「それ、音楽、何聴いてたの？」

何を話していいか分からず、高橋の手にあるヘッドフォンが目に入っただけ、

安直だが、訊いてみることにした。

「えと、KEANEっていうバンド、かな」

「うう……知らない……」

しまった……バンドマン相手に音楽の話題って、

格闘家相手にインドア派が闘いを挑むようなもんだよな、たぶん、きつと。

「ほら、イギリスのバンドだし、知らなくとも無理はないと言うか、だから、その……」

すごい勢いであたふたする高橋。気を遣ってくれているだろうか、ちよつとだけ嬉しい。

「ありがと。えと、きーん、だっけ？私にも聴かせて」

なんで礼を言われたのか理解できない風に高橋は一瞬怪訝そうな顔を見せて、

「いいよ、はい」

って笑いながらMP3プレイヤーとヘッドフォンを手渡してくれた。私はヘッドフォンを装着し、プレイヤーのスイッチを押す。ポチっとな。

一瞬、無音の世界が広がって、その後、イントロが私の耳に入ってくる。

無音の世界を挟んで別の世界が開かれたかのように、音楽は私を包んだ。

私は目を閉じて、その世界に身を委ねる。

正直、音楽のことはよく分らない。

けど、目を開けたら広がっているであろう景色と同じくらい、その世界は美しかった。

きれいで、繊細で、クラシックの歌とも、私がいつも聴く歌とも違う、歌声。

こんな風に歌を歌う人がいるなんて初めて知った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4623c/>

眠れぬ夜の夜想曲

2010年10月9日16時01分発行